

R6 総括コメント (音楽学部)

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	小林 聡	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献のすべての分野に渡り、できる限りのことは行った。及第点には達していると思う。研究活動がもう少し欲しい。
作曲	教授	山本 裕之	本年度は約4半世紀ぶりの個展を開催した。この個展公演においては自分の近作を中心に四分音の衝突をテーマとした七作品を上演・演奏することができた。多くの反響を得ることができ、自分自身としては一つの達成感を感じることができたと同時に、その次の研究上のステップへのヒントを得ることができたと感じている。大学運営については、最近会議の類が非常に多く、また予算逼迫の中での運営に困難を感じている（大学全体としても会議が増えることが人的リソースの過度な消費に繋がるのではないかと懸念を感じている）。ある程度仕方ないとはいえ、大学経営が明らかに守り入り、事業や授業の質の低下が大いに懸念される。特に学生とのフリートークの時間がなくなりつつあることに、相互のコミュニケーション不足や課題を察知する機会の喪失などを心配している。
作曲	教授	成本 理香	計画はすべて行うことができた。学部長を拝命して1年目で、毎日が嵐のような日々であったが、同僚教員、職員のサポートもありどうか1年を過ごせた。東京での音大フェアへの参加、冬のフンポイントレッスン、講義動画作成等これまで行ってこなかったさまざまなアイデアを実現できたことは大きい。 一方で、学部長として大学運営業務に裂かれる時間が多すぎて、昨年度に比べると創作は計画通りできたとはいえ、ペースが少し落ちた。今後の課題である。
作曲	准教授	安野 太郎	昨年度発表したソング音楽『大霊廟IV -音楽崩壊-』がサントリー芸術財団の佐治敬三賞を受賞し、ある種の社会的なインパクトを与えられて良かった。その他の取り組みについても順調に進めることができた。
音楽学	教授	安原 雅之	概ね計画は遂行できた。今後は、研究活動にもっと重点を置きたい。
音楽学	教授	東谷 護	今年度は大学運営において緊急案件が何回か生じてしまったため、博士後期課程委員会の委員長としての業務に最大の時間を割いた。加えて、昨年度からの継続として、博士後期課程の充実に向けて、カリキュラム改革案を委員会に提示できたことは委員長の責務を果たしたと言える。 教育面においては、博士論文1本の副査と、副指導に携わったことをはじめとして、修士論文、卒業論文執筆の学生への懇切丁寧な指導を行ったと自負している。この経験を近い将来、書籍として世に問える準備をしている。 このような充実した面とは別に、学術面では研究を地道に進めたものの、大きな成果に結びつけることが出来なかったのは残念である。同様に、社会貢献にまで手が回せなかった点も心残りである。来年度以降はバランスよく時間配分をしたいと思う。総じて、大学運営、教育、研究、社会貢献それぞれに力を尽くしたと言える。
音楽学	講師	七條めぐみ	研究活動においては、一次資料の分析に基づく論文を執筆するとともに、全国大会での口頭発表を行った。教育活動では、卒論2本、修論3本、修了論文15本の指導に携わる中で、特に博士前期課程の大学院生が主体的に研究に取り組むための授業内容の改善を行った。大学運営では、音楽カリキュラム委員長として、R8年度のカリキュラム改正に向けた具体的なカリキュラム案の作成・検討を進めた。大学運営業務が多岐にわたり、研究時間の確保が難しく、書籍の執筆が当初の予定ほど進んでいないのが課題である。
声楽	教授	中巻 寛子	在職最終年度に当たり、すべての活動に全力を傾倒した。その結果として、教育活動、大学運営、社会貢献については、納得の行く活動ができた。さらに、研究活動については、共著書1冊の刊行に加えて、次年度からの本格的な再始動のための準備ができたと考えている。
声楽	教授	森川 栄子	R6年度は、自分自身の研究活動については目標達成には至らなかったが、教育活動や社会貢献において、大きな成果を挙げることが出来たと考えている。

R6 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	小原 啓楼	日本声楽発声学会での発表や、東京都交響楽団・東京フィル・名古屋フィル・兵庫芸術文化センター管弦楽団などの公演では、いくつかの反省点などももちろんあるものの、各指揮者とともに大いに研究分野の進展を得られるものとなった。教育分野では、加速する社会・音楽市場の不可逆的变化に合わせたコーチングが次第に効果を上げつつあるが、様々な悩みや迷いをもつ学生の状況にあったフォローアップの必要性は更に増している。学生のベネフィットを最優先に具体的実践例を示しつつ、各々に合わせた示唆を更に目指したいと思う。
声楽	准教授	川島 幸子	概ね、一年を通して偏り無く取り組むことが出来た。
声楽	准教授	初鹿野 剛	今年度は特に「オペラ総合演習」、その成果発表ともなる大学オペラ公演への比重が大きかった。井上道義氏の全国《ボエーム》公演に音楽スタッフのみならず控えに入らざるを得なかった指揮の桑原氏の穴を埋め、稽古を進行させなければいけなかったことで、副指揮として指揮を振り、空いた時間でバルトロとして歌うという、落ち着かない状態だった。また、制作としてはチケット収入増加策の一環として「プレミアムシート」制度の導入と制度設計を担当するなど中々ハードであったがやり切ることが出来た。今後も邁進していきたい。
声楽	准教授	森 寿美	各項目で目標として掲げた内容を達成することができた。年々、社会とのつながりがある活動ができてきたこともよかった点である。所属学生数多い中で大学運営の負担が大きくなってきておりバランスをとりながら研究・教育の質を保ちながら活動することが年々難しいが引き続き努力していきたい。
ピアノ	教授	北住 淳	32年間の本学専任としての音楽生活を振り返ると、芸術活動にたいする社会の関わりや注目を「芸術家の自己責任でおこなう」風潮はこの30年余りで益々浸透してきたように思われる。本学の法人化自体がそのことを現しているが、社会が芸術を正しく批判・受容し「関係性」ではなく「関係」そのものを構築する社会への道筋は未だ模索の途上にある。本学が芸術の貴重な「地域貢献拠点」として、この困難な時代の状況下で今後益々発展していくことを願ってやまない。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	施設整備委員会副委員長としての業務および教育活動と並行して研究活動を継続し、セルゲイ・ラフマニノフ生誕150周年記念ピアノ独奏作品全曲演奏会Vol.4（最終回）を行った。研究活動の時間の捻出に苦労しながらも継続できたことが全4回の演奏会企画の完遂につながった。決して満足のゆく演奏内容ではなかったが、準備を含めて作品理解が深まった。
ピアノ	教授	内本 久美	国際的に活動するプロの演奏家との共同研究を通じ、多くを学ぶ一年であった。国内外において十分な研究成果を発表出来たといえる。今年度の学びと経験を新たに学生へ還元すること、また自らの研究をより深めてゆくことを次年度の課題とする。
ピアノ	教授	鈴木 謙一郎	コロナ禍での研究、授業の制限も大分無くなり、全てにおいて順調に進めた。
ピアノ	准教授	中尾 純	ベートーヴェン後期の大作、ディアベリ変奏曲を東京文化会館他で披露した。リサイタル以外にも各種プロジェクトを通じて、子供たちと音楽による交流をもつことができた。教育面では、一人一人の学生が弛まぬ研鑽の成果を学内外で示してくれた。
ピアノ	准教授	武内 俊之	4項目ともに基本的に計画・目標に沿った活動を展開し、それを達成することができたと判断する。 今後に向けては、自分自身の意志と方向性を明確にし、それに基づく個性ある活動を確立していきたい。
ピアノ	講師	秋場 敬浩	研究活動においては、昨年度から編纂および解説執筆を進めていた『ロシア・ピアノ小品集』（音楽之友社）が上梓に至り、また、コロナ禍によって長らく中断されていた海外におけるリサイタル発表（アルメニア、イエレヴァン市）を再開することができた。教育活動においては、第57回カワイ・ピアノコンクール全国大会ソロ部門Sコース金賞をはじめとした複数の受賞者輩出した。また、大学院科目である「特殊研究」においては、自らの主要な研究主題であるS. フェーインベルクのピアノリズム論をめぐる研究成果を授業内容に反映し、学生の演奏研究において有用性の高い知識や実践例の多くを提示することができた。

R6 総括コメント (音楽学部)

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
弦楽器	教授	福本 泰之	コンサートの数はピーク時に比べれば半数ほどではあるが、新たに「室内楽の響演」のシリーズを企画するなど充実した一年が送れた。一方運営面では、社会連携センター長として更に努力をしなければならぬと思いつつも、認証評価や自己点検委のことで本来のセンター長としての役割との両立が出来ず、どちらも中途半端に終わってしまったことが反省点である。
弦楽器	教授	白石 禮子	計画していた研究活動を全て行い、演奏会はいずれも大変好評であった。教育活動では、総じて学生は皆真剣にレッスンに臨み、複数の学生が学部定演のソロ出演や「室内楽の夕べ」出演、本学大学院進学等、多くの成果を挙げた。向上心の強い学生ほど周到な準備を行い、当然疑問や質問も多いが、学生個人に合わせた解決策を見出すことは勿論、「プロ」の考え方にまで意識を繋げる指導を心掛けている。社会貢献では、学外で開催されたオーディションやコンクールの審査を計画通りに行った他、東京で開催された朝日新聞社主催・音大フェアに本学も初めて参加、他大学が学生によるデモンストレーション演奏を行う中、本学は教員2名のデュオで臨み、手応えを感じた。
弦楽器	教授	桐山 建志	特に研究活動では、知られざる名曲の発掘に努め、大きな成果をあげることができた。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	本年度は2度のソロリサイタルを開催し、新曲委嘱作品を世界初演するなど、コントラバスソロの分野の開拓に注力した一年でした。大学オーケストラの定期演奏会では、秋山和慶先生をお迎えし、それぞれの楽曲の細部まで、緻密なこだわりを妥協なくリハーサルしていただき、学生も多くのことを学びました。コントラバス実技の方では、年に4回、試演会を開催し、それぞれの学生の成長度合いを見ることができました。学生自身が自分の演奏を客観視して、一番厳しい教師となって、演奏力の向上に取り組んでもらえるよう、更なる自発性を促せるようになりたいと思います。
弦楽器	准教授	西谷 牧人	本学の常勤教員となって初めての年ということで、個人レッスン以外の授業や大学内の日常的な業務など全てが初めての中、本学のこれまでの様々な歴史の上に成り立つ現在の状況を知り、今後の大学の発展のためには何が必要とされているのか、考えさせられる一年であった。
管打楽器	教授	倉田 寛	本学では、令和6年度において地域貢献活動に積極的に取り組みました。日進市との連携事業「キラキラ金管楽器」では、教員と学生によるスペシャルアンサンブルを披露しながら、日進市の子どもたちに金管楽器の魅力と音楽の楽しさを新たな視点で伝えることができました。このような専門性の高い教育現場を通じて、生の「音」に触れる機会を提供することは、次世代の芸術家を育てるうえで非常に重要であり、今後の育成にも必ずつながると確信しています。 また、「こども愛知芸大」（主催：名古屋中ロータリークラブ・本学）や、令和6年度「学校における文化芸術鑑賞・体験推進事業」では、リコーダーの実演を交えながら、子どもたちや教員とともに芸術の楽しさを実感する機会を創出しました。さらに、共演した学生との意見交換や実践活動を通じて、キャリア支援の観点からも大きな意義があったと考えます。芸術文化を育む担い手としての教育は、将来的に地域の財産として必ず還元されると信じています。 研究活動においても、ソロ・室内楽・オーケストラの分野で充実した成果を収めました。特に、クリスマス祝祭管弦楽団への参加（地上波放送あり）やパイプオルガンとの共演など、貴重な実践の場を得ることができました。「音色・響き・表現」に加え、「声・歌・楽器」など自身の研究テーマに基づく実践的な探求を深めることができ、本学の実技教育と研究活動のさらなる発展につながりました。
管打楽器	教授	深町 浩司	国際音楽祭の吹奏楽団（ワールド・ドリーム・ウインド・オーケストラ）への参加、メロッドを活用した実技指導、音響学会における研究発表、「共鳴～Kyo-meji」プロジェクトによる社会貢献、これらの活動の源となったのはパーカッション奏法の基礎研究である。基礎研究の積み上げが発展しさまざまな分野で成果を生み出すことができたと自負している

R6 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	橋本 岳人	研究活動ではソウルフィル他国内外のオーケストラで首席客演を務めた他、室内楽、ソロ活動とバランス良く行うことが出来た。教育活動では多くの試演会を開催したことで学生が切磋琢磨し、コンクールでは上位入賞を輩出、また学内試験でも最良の結果を残すことが出来た。また多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務める他、国内の音楽高校でも公開講座を行い後進の指導を行う等、国内の音楽界に貢献した。
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	学生の指導と個人研究のバランスを取りながら、毎週大学に通って准教授を勤めます。
管打楽器	准教授	井上 圭	演奏研究に関しては計画以上の成果をあげる事が出来た。 少子化などへの対応は計画通りに行えたが、楽器体験の機会を増やすなど、さらなる取組みの必要性を感じた。
教養	教授	水野 留規	研究面ではイタリア学会における国際シンポジウムでイタリア語による研究発表を行い、長年にわたる叙事詩の翻訳も一通り完成させることができた。地域貢献の面では、大学と日進市の連携講座を担当した。東大やイタリアの教育機関から教員を独自に招いて、共同授業運営、共同研究、退官講義（一般公開）を実施することができた。教育面では今年度もイタリア語上級の学生達を国際的な語学資格（CELI）取得に挑戦させることが出来た。
教養	教授	三宮 敦生	研究面では、ベイズ統計を用いて人間の認知過程を探る手法について理解を深めることができた。教育面では、授業評価アンケートの「授業全般について総合的に評価すると良い授業だと思いますか」という問いに対して、「強くそう思う」と答えた者が、心理学Aで63%、心理学Bで80%、教育心理学で59%であった。まずまずの結果だと思われる。大学運営面では3つの委員会に所属し、活動した。社会貢献では、『親子孫で〈楽しい仮説実験〉講座』を夏休みに二日にわたって本学で開催することができた。
教養	教授	井上 彩	令和6年度は音楽学部教務委員長として6年目を迎え、また人事委員会、全学カリキュラム委員会、学生支援センター運営会議で副委員長を務めた。健全な大学運営の一助となるよう努力した。教育に関してはほとんどの科目で新たな授業内アクティビティを導入し、効果を実感することができた。研究面ではコロナ禍をきっかけとして普及したオンラインでの研究活動の恩恵を大いに受けている。科研費の助成事業である研究課題については2つの国際学会と国内学会地区例会で発表することができたが、論文執筆のための時間を確保することが課題である。その他の研究課題については共著論文を刊行することができた。
教養	教授	大塚 直	令和6年度は入試委員長と紀要委員長を務め、教授会やセンター会議で委員会報告を行った。また科研費による研究をもとに7月上旬に名古屋大学で講演会を行い、9月上旬にベルリンに短期滞在して、現地視察および資料蒐集を行った。また日本におけるホルヴァート公演に関してドイツ語で論文を執筆した。
教養	准教授	三品 陽平	研究活動については、日本教師教育学会が設定する課題部会に大きく貢献することができた。教育活動については、学生の個別の相談や学習支援をおこなうことができた。大学運営については教職課程運営の安定につながる仕事に努めることができた。社会貢献については、教員のワーク・ライフ・バランスに関する相談に対応することができた。